

withコロナ時代はいつまで続く

向井 秀樹

新年明けましておめでとうございます。2023年はいったいどういう1年になるのか、やはり最大の関心事はコロナ感染症の動向だと思う。誰もが予想しなかったコロナ感染症の猛威が、なんと3年間もわれわれの日常生活を制限している。昨年10月、第7波のピークが終わりを迎え、政府主導で全国旅行支援やGo To Eatキャンペーンなどが再開されている。外国観光客の緩和に伴い、街並みに外国人が目立つようになった。円安に伴い日本経済が悪化している中、その立て直しは重要な課題であるが、1月はインフルエンザとコロナ感染症がダブルで猛威を振るうと予想されている。すでに昨年11月15日付けで患者数1万人を超え、厚生労働省の専門家組織は第8波としている。全国の病床使用率は上昇傾向であるが、重症者や死亡者が少ないのが救いである。

現在は“BA.5”が主流であるが、12月には“BQ.1”が8割を占めるという。この“BQ.1”は、ワクチンや感染で得た免疫の一部が効きにくいといわれている。コロナウイルスは変異を続けながら、私たちの生活に膨大な影響を与えている。いったいいつまで続くのであろうか、終わることはなく共存し続けるように思えてならない。

気になるニュースとして、新型コロナウイルスに関する研究が、とくにここ日本で低調との報道がある。日本からのコロナ関連の研究論文は、数でも質でも主要7カ国の中で3年連続最下位の見通しだという。研究力の低下は、医薬品の開発や科学的知見に基づいた政策判断をむずかしくするし、国産のワクチンや抗ウイルス薬の開発は進まない。海外に比べて研究者の数や環境の差に加え、とくに資金力の違いが指摘される。今後、新たなパンデミックの可能性も考えられ、政府主導で日本の感染症専門医や研究者の育成に目を向けていただきたい。

さて創刊45周年を迎える本誌は、すでに昨年中から今年度の特集ラインナップについてご案内している。この1月号は感染や重症化予防を目的としたコロナワクチンが、驚くべきことに実に多くの皮膚病と関連しているという主旨の特集からスタートする。2月号は「紅皮症の考え方と捉え方」で、全身に紅斑がみられるが詳細に観察すると原疾患はみえてくる、そしてその適切な治療法など興味は尽きない。目新しさでいうと、9月号の「新規知見の乏しい皮膚疾患」は、どのような仕上がりになるのか楽しみである。皮膚診断学や皮膚治療学が急速に進歩する現在にあって、いまだ原因や治療法の少ない疾患とは？ 将来的にその糸口は見出せるのか？

1月号の読みどころは「新春放談」であり、今回は“新規治療薬への期待と懸念”をテーマに選んだ。特別ゲストとして、元編集委員長の西岡清先生に外用薬の歴史をお話いただいた。

2023年も最新の情報が満載で、読み応えのある誌面を目指している。今年度も本誌のご愛読をよろしくお願い申し上げます。